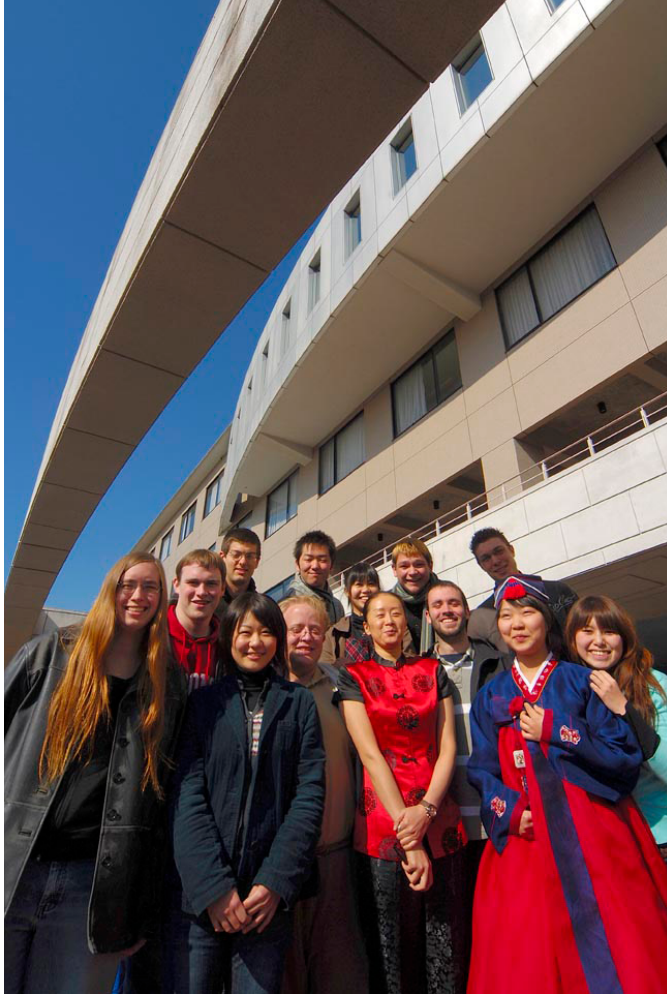




建学の精神

長崎学院は学則の第1条で、「本学は、教育基本法に則り学校教育法の定める大学として、キリスト教精神に基づき、外国語と国際文化に関する知識を教授研究し、国際的な視野と円満な人格の涵養を図り、もって地域並びに人類社会の福祉と発展に寄与しうる人材を育成することを目的とする」と謳っています。

スクールモットーは、「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネによる福音書14章6節)というイエス・キリストの言葉であり、その「道・真理・命」を意味するラテン語のVIA VERITAS VITA(ウィーア・ウェーリタース・ウィータ)が校舎正面に大きく掲げられています。また校章は、その頭文字のVを三つ組み合わせたデザインとなっていて、創立20周年を記念して1965年(昭和40)12月に制定されました。



長崎学院 校章・マーク
「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネによる福音書14章6節)から採られた三つのラテン語VIA VERITAS VITA(道・真理・命)の頭文字であるVを重ねたデザインです。

学校法人 長崎学院

〒851-2196 長崎県長崎市横尾3-15-1

TEL : 095-840-2000 FAX : 095-840-2001



創立

第二次世界大戦の敗戦は日本の社会に深刻な衝撃を与え、未曾有の精神的・物質的荒廃をもたらしました。特に学業半ばに、一切を投げ打って戦場に赴いた学生や生徒が受けた打撃は例えようがありませんでした。彼らは挫折感と絶望に打ちひしがれ、勉学意欲を喪失し、虚脱状態で町々を彷徨しました。彼らを学校に戻し、新たな目標を見出させること、さらには、これから育ってくる若者たちに学校教育を通じて新たな未来を切り拓く知恵と勇気を与えることが急務と考えられました。

このような状況下で、当時、長崎馬町教会の牧師であった青山武雄は、原爆により廃墟となった長崎の地で、新しい時代の日本を担う人材育成を決意したのです。このとき青山をはじめとする学院創立者たちが教育の基本に据えた理念は、プロテスタント・キリスト教主義でした。日本の将来を担う人物は、世界的な視野と教養を身につけた人格者であらねばならない。また、先の大戦の反省から、世界平和と人類の共存共栄の理想を実現するためには、外国語を用いて異なる国々の人々と対話し、異文化を理解し尊重する若者を養成しなければならない。そして日本の良心たるそのような自立した人間の教育の基盤は、キリスト教の「隣人愛」「献身と奉仕の精神」「真理と自由の探求」という普遍的な価値観にこそ置かれるべきである、と彼らは考えたのです。

加えて、古くから海外との交易で栄え、江戸時代には海外文化移入の一大拠点となり、維新前には我が国最初的外国語学校が開設されて近代日本の揺籃となった長崎、そしていまなお国際的雰囲気の色濃くとどめる長崎は、外国語教育の新たな理想の実現に最適の地でもありました。

このような信念のもと、敗戦の年の12月1日に、青山たちは長崎キリスト教青年会(長崎YMCA)を再建し、夢の実現に着手しました。1947年(昭和22)〈長崎外国語学校〉が開校、英文科及び商科に各50名の学生が入学しました。また、市民の語学教育センターとして夜間専攻科を開設しました。1950年(昭和25)には〈長崎外国語短期大学〉を設立し、語学教育を通してのキリスト教全人教育に専心してきました。

創立の背景と歴史

1945年(昭和20)8月9日午前11時2分、長崎は原子爆弾の投下を受けました。創立者である青山武雄は、当時、東陵学園中学校の教師として、勤労動員学生を引率して三菱重工長崎造船所構内にいました。1939年(昭和13)日本組合基督長崎教会(のちの日本キリスト教団長崎馬町教会)の牧師に就任した青山は、「国民勤労報国協力令」により東陵学園中学校での勤労奉仕を強制されていたのです。キリスト教主義による総合的な人間教育に関心を持っていた青山は、実戦の経験を積むチャンスとして受け入れていましたが、結果として兵器工場に引率した生徒たちの多くを原爆で失い、悔恨の思いに駆られます。その償いのために長崎復興のために何かを為さなければと考えたとき、15年間事業を休止している長崎YMCAのことが頭に浮かびました。

長崎YMCAは1884年(明治17)に設立。国粋主義の台頭により一時期の衰退を経て、鎮西学館(現・鎮西学院)、東山学院(のちに明治学院に併合)、第五高等学校医学部(のちの長崎大学医学部)に学生YMCAが組織されました。鎮西学館の副院長だった笹森宇一郎によって、1902年(明治35)長崎YMCAが再結成され、赤煉瓦づくり三階建ての会館が竣工。しかしこれも、昭和初年の世界大恐慌が経営圧迫に止めを刺す形となって休会していたのです。

青山は、長崎YMCAの復興を期し、バプテスト教会の藤澤繁牧師と飽之浦教会の川上平三牧師に協力を求めました。被災した会館は長崎市公会堂になっており、市に掛け合いましたが譲渡が認められず、1945年(昭和20)12月1日、長崎YMCAは長崎馬町教会を仮事務所として再出発し、青山は総事に就きました。長崎港に多数のアメリカ兵が進駐してきたこともあって、英語学習熱が高揚。「英語講習会」を開講して、基礎英語を青山が、英会話を活水女子専門学校の岩崎ヤスが担当しました。また、長崎市内の主立ったキリスト者が集まって〈長崎基督教青年会常任委員会〉が設置され、英語講座を学校組織にすることが承認されました。牧師を辞任して学校設立に専念した青山は、1947年(昭和22)に仮校舎で始まった〈長崎外国語学校専門部〉の初代学長を、元・長崎医科大学学長の古屋野宏平が初代理事長を務めました。

引揚者青年への対応や、健全娯楽で非行防止が期待できるYMCAの活動は公益性が高いと認められ、長崎YMCA会館用地として、長崎市から1000坪の提供が見込まれることになりました。一方、アメリカ及びカナダのYMCAは、第二次大戦の終結に伴ない、被災国の復興と前進のための大規模な募金運動を始めていました。長崎YMCA会館は、市から提供の土地、アメリカ・カナダYMCAからの浄財、地元長崎での募金によって、1948年(昭和23)12月15日、ようやく完成したのです。

しかし、新学制の施行に伴う改革で、旧制の専門学校が新学制に継承されないことに決まったため、在校生からの苦情が続出し、短期大学としての昇格が急務となりました。また、従来のYMCA活動と学校の関係、特に浄財によって建設された長崎YMCA会館を学校に



創立者 青山武雄(1906~1974年)
キリスト教主義による教育で、人々の戦争で失われた明日への希望を取り戻したいと願いました。

